

## 中国水墨画と「気」

満 柏

「気」という概念は中国伝統思想の中でもっとも古くて重要な概念の一つである。それは、人間に生命を与え、天地宇宙を変動させるチカラである。「気」の概念は、中国の哲学、医学にとどまらず、絵画にも及んぶ。南齊の画家謝赫が『古画品録序』のなかで、「気韻」を絵の判断基準の第一位とし、『絵画は「生動」でなければならない』と言った。唐の末期を生きた画家荆浩も「気」と「韻」とを絵画の「六つ<sup>かなめ</sup>の要」の主要な位置においたのである。

気韻の「韻」は「韻律」という言葉が示したように一種のリズミ的な要素として理解できる。しかし、「気」の方は哲学的な概念としても大きな存在であり、理解しがたい。一部の学者はそれを芸術品の生命力、描かれた対象の精神性として解釈したが、詳しい分析がなかなかできていない。「気」と並んで、画論のなかに「神」、「心」、「意」などの概念も多用される。それらの言葉は、「気」より芸術品の生命力や精神性をさした言葉としてもっと相応しい。

さて、水墨画における「気」というのは何をさしたのだろうか。これを理解するため、中国絵画の特徴をもう一度検討する必要がある。水墨画の特徴といえば、墨を用いて、対象の外形を輪郭線で捕らえ、対象の肌理や質感を線や墨で表現することであろう。そこに自然の光り、陰影をほとんど無視する。西洋絵画と比べれば、水墨画は画面に色で埋め尽くすことなく、紙の下地が余白として多く残る。その結果、絵を構成する一番小さい要素としての点やら線やら、つながりが少なく、抽象的で、記号のような存在であり、曖昧さを帯びる。

一つの点は何を表したかを知るのに、その周りの画面だけでは不十分で、画面全体によって判断しなければならない。例えば、山水画において一つの黒い点は画面にあった位置によって、表した内容が変わる。同じ形の点は、画面の下部にあれば、近景の石ころに見えるが、上部にあれば、遠景の木となる。また、同じ白く見える紙は線に囲まれた図形の内側の部分は、岩の一部として見えるが、線の外側の部分は空になり、雲になり、水となる。つまり、画面の一部分は画面全体の中の一部であり、その意味は画面全体によって規定される。

絵画はもともと基本要素の点、線や色によって構成される。これらの要素を絵として見るのは人間だけである。絵を見る時に、人間は画面上のさまざまな線と点を統括

して認識する傾向がある。これはゲシュタルト心理学の実験によっても証明されている。点や線などをまとめて認識する結果、画面の構成要素としての点や線は対象の輪郭として見え、描かれたものに対するイメージが脳の中に創りあげられる。描かれたものに対するイメージをスムーズに創りあげることができれば、それは絵を見る喜びの一つとなる。筆者の考えでは、この能力は人間特有のものであり、また、人間は自分の能力をスムーズに発揮することに、喜びを感じるのだと思う。

西洋伝統絵画は光りと陰影を描写する方法を用いて、画面の隅々まで描かれるため、全体への把握がなくても即座に描かれた対象のイメージが得られる。このため、絵を見る喜びは、おのずと線と形の排列と比率に求めたのである。しかし、中国絵画は、上で述べたように、その抽象性によって、部分と全体とを同時に把握し、イメージを創り上げることが要求されるため、中国絵画の鑑賞者は常に全体を統括的に把握する能力が要求される。各部分を繋げて全体としてみることは、「心」の強い働きがなければならない。中国絵画を論じる時に、「神」、「心」、「意」などの心に関連する概念が強調される所以であろう。



山水册页(之七)



同じ濃淡のところは繋がるように見えます。これは「気」です。枝に注目。「気」は山水画の命です。赤い線は「気脈」の一種です。赤い線の上に描いた墨は濃いですが、完全に繋がると、「気」はなくなる。青い線も「気脈」です。青い線の上にある墨は薄いです。

惲寿平作

水墨画は、簡素な筆遣いで対象を描くため、人間の脳の中に創り上げられたイメージは、曖昧で不安定なところが多い。イメージの不安定さは心の動きとして自覚される。画面を全体として把握しようとする意志、あるいはこのような心の働きを、恐らく「気」として、古代中国人は水墨画の中に見たのであろう。事物の背後にあり、事物に動かせる力ととらえられる「気」は、言い換えれば、イメージを形成させ、各部分をつなぎ合わせるチカラとして理解してもよいだろう。絵の各部分をつなげる力であるため、「気」は描かれてないところに存在する。

各図形の力の引き合い、バランス、またイメージとイメージとの間の関係は全て「気」にかかわる。これらの関係が調和した状態は「気」が画面全体に行き渡った状態であり、鑑賞者はイメージを自由自在に形成し、描かれた対象は躍動し、生命力をもち、「気韻生動」の、最高の価値を有した芸術品となる。

本文は「水墨之友」などの出版物に掲載された文章を少し筆を加えたものである。

201002